全海運所属組合の横顔

連載　第 12 回

四国地方海運組合連合会

その 2　香川県海運組合

【組合の概要】

事　務　局　〒 760-0020
香川県高松市錦町 1-21-3
開拓ビル 4 階
電話　087-851-0833　FAX 087-851-0834
JR『高松』駅下車徒歩 3 分

理　事　長　福村　忠司　三福海運㈱代表取締役

事 務 局 長　谷　　良夫

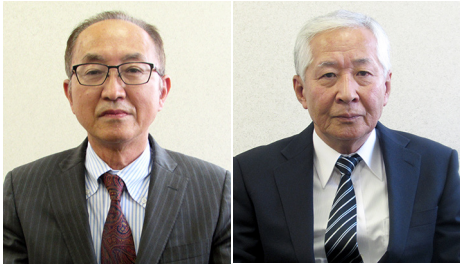
事務局員数　男子 1 名（事務局長含む）、女子 1 名

組 合 員 数（休業除く）

運送事業者	14 社	
貸渡事業者	48 社	
利用運送業者	2 社	
合　計	64 社	

所属船腹量

貨　物　船	73 隻	98,402	重量ﾄﾝ
油　送　船	24 隻	19,305	㎥
プッシャー	4 隻	539	重量ﾄﾝ
艀・台　船	8 隻	6,039	重量ﾄﾝ
合　計	109 隻	124,285	重量ﾄﾝ㎥ PS



福村理事長（左）と谷事務局長

事務局のある高松市錦町（Yahoo! map）

香川県海運組合が入居する開拓ビル

塩飽水軍に始まる海運業

【讃岐海運の発祥】

神代の時代に遡ると『日本書紀』では、讃岐の国は日本武尊（やまとたけるのみこと）との関わりがあると記されている。4 世紀前半頃、第 12 代景行（けいこう）天皇の三男である日本武尊は、九州で熊曾（くまそ）の反乱を鎮圧して大和へ帰ると、まだ疲れも癒えないうちに、今度は東国の乱を鎮めるよう父から命令を受けて出発するが、この東征には妃である妃弟橘媛命（おとたちばなひめのみこと）が同行した。弟橘媛命は讃岐国多度郡（現在の香川県善通寺市）にある大麻神社（現存）の神主の娘として生まれたといわれている。妃を伴った日本武尊はまず伊勢神宮に参拝し、そこで天叢雲（あめのむらくも）の剣を授けられた。その剣は、神話の中で、素戔嗚尊（すさのおのみこと）が八岐大蛇（やまたのおろち）を退治したときに、その尾から現れたと伝えられている。

日本武尊が相模国（現神奈川県）に至ったとき、弟橘媛命は相模の行政官である国造（くにのみやつこ）に騙され、野原の中に入ったところに火をつけられ、危うく焼き殺されそうになったが、日本武尊が剣を出して草を薙（くさなぎ）ぎ払い、逆に火をつけて敵を破った。ここからこの剣は草薙の剣と呼ばれ八咫鏡（やたのかがみ）、八坂瓊曲玉（やさかにのまがたま）とともに、やがて「三種の神器」として歴代の天皇に受けつがれる皇位のしるしとなったとされる。日本武尊と弟橘媛命はさらに旅を続け、相模の国

から走水（はしりみず）の海を船で渡り、対岸の上総国（現千葉県）に渡った。走水の海とは、東京湾の浦賀水道のことで、三浦半島の横須賀市辺りから船出し、房総半島の木更津辺りを目指したと考えられている。

しかし、日本武尊の言動を軽はずみと怒った海神が荒波を起こしたため、船は木の葉のように翻弄されて、今にも沈没しそうになった。このとき弟橘媛命は、海の神の怒りを解くため、日本武尊の身代わりとなって海に身を投げた。すると、それまで荒れ狂っていた海も次第に静まり、難航した船は無事に上総の国に上陸することが出来た。彼女が持っていた櫛は7日後、海岸に流れ着いたとされ日本武尊は、これを手厚く葬ったという。この後、日本武尊は東方の乱れを鎮めて大和へ帰る途中、箱根の碓氷の坂で、東の走水の海の方向を臨んで、弟橘媛命を偲び、「吾妻はや」（ああ、我が妻よ）と嘆いた。それから箱根より東の方角を「東（あずま）」と呼ぶようになったとのことである。

事務局。事務局員の大山幸奈さん（左）と谷事務局長

時代は16世紀の瀬戸内海に移る。面積0.7㎢、周囲4.2kmの小さな島である塩飽諸島（しわくしょとう）（現香川県）牛島に、「瀬戸内随一の豪商」と謳われ、「内海の海上王」とも称された丸尾五左衛門が居た。塩飽水軍の一族で、讃岐の海運の祖ともされている。

塩飽諸島は、現在の岡山県と香川県に挟まれた西備讃瀬戸に浮かぶ大小合わせて28の島々からなり、戦国時代に塩飽水軍が活躍し、江戸時代には人名（にんみょう）による自治体制が塩飽諸島に敷かれていた。人名とは江戸幕府から自治権を与えられ、人名株を代々世襲する塩飽諸島の者をいい、彼らは勤番所で自治行政を担う御用船方を務めていた。塩飽諸島は古代から海上交通の要衝で潮流が早く、周辺には操船に長けた島民が住んでいた。源平合戦の屋島の戦い、建武の新政から離反して九州に逃れた足利尊氏の再上洛の戦いなどの舞台もとなり、塩飽諸島の住民は塩飽水軍と呼ばれて、一大勢力を持っていた。豊臣秀吉は天正14年（1588）の九州征伐に際し、兵を運ぶ船を彼らに出させ、その労に報いて天正18年（1590）には、船方650人に御用船方として本島、広島、与島、櫃石（ひついし）島、手島、高見島、牛島の塩飽七島の1,250石を与えた。徳川家康も関ヶ原の戦い直後の慶長5年（1600）、この船方に塩飽七島を安堵した。

塩飽水軍は江戸時代を通じて周囲の高松藩、丸亀藩、岡山藩などのいずれにも属さず、自治領として明治維新まで独立した存在だった。河村瑞賢（かわむらずいけん）が徳川幕府の命を受け、寛文12年（1672）に出羽国の年貢米を江戸に運ぶべく西廻り航路を確立すると、塩飽七島の住民はその運航を担い、廻船に金毘羅大権現の旗を掲げて江戸や大阪などに諸国の物産を運び込んだ。多くの塩飽廻船が江戸や大阪など諸国の港を頻繁に出入りし、その評判は全国に知れわたった。塩飽廻船は、金毘羅大権現の旗を掲げて諸国を巡ったので、これが金毘羅さんを「航海の神」として全国に広く知られるようにした由来ともいわれている。

幕末に至っても塩飽水軍は活躍している。幕府は万延元年（1860）、日米通称条約の批准書を交換すべく遣米使節団を乗せた米軍艦『ポーハタン号』の随伴として『咸臨丸（かいりんまる）』を派遣したが、この太平洋横断に水夫として活躍した水夫50人中35人は、塩飽七島の島民が占めていたという。

丸尾五左衛門は元々、東氏と称する肥後（現熊本県）の武士だったといわれ、肥後の阿蘇氏、加藤氏に仕えていたが、江戸時代初め、不遇な自らに愛想をつかして浪人となり、上方へ流

香川県海運組合所属事業者と船腹量

令和2年10月1日現在／休業除く　　香川県海運組合

区分		事業者数	貨物船		油送船		曳船		台船		バージ		プッシャー		合　計	
			隻数	重量ﾄﾝ数	隻数	㎥	隻数	PS	隻数	重量ﾄﾝ数	隻数	重量ﾄﾝ数	隻数	重量ﾄﾝ数	隻数	重量ﾄﾝ数㎥PS
運送業	登録運送業	14	9	9,623	1	340	0	0	7	6,522	0	0	2	473	19	16,958
	届出運送業	1	1	208	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	208
	計	15	10	9,831	1	340	0	0	7	6,522	0	0	2	473	20	17,166
貸渡業	登録貸渡業	44	49	68,089	22	17,731	0	0	0	0	2	617	2	66	75	86,503
	届出貸渡業	1	1	337	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	337
	計	45	50	68,426	22	17,731	0	0	0	0	2	617	2	66	76	86,840
利用運送業		2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合　計		62	60	78,257	23	18,071	0	0	7	6,522	2	617	4	539	96	104,006

れる途中で塩飽の牛島に立ち寄り、そのまま住み着き初代丸尾五左衛門を名乗ったと伝えられている。丸尾氏が牛島で廻船業を始めたのは、寛永２年（1625）生まれの２代目五左門重次のときからだとされている。河村瑞賢は航路開設に当たり、城米船を幕府が直接雇って運賃を支払う官船とすること、その船は「北国、山陰方面の航行に慣れた讃岐の塩飽、備前の日比浦、摂津の伝法・河辺・脇浜などの船」を雇うよう幕府に提案し、この方策が採用され、塩飽廻船の多くが城米御用船として幕府に直接雇われ、西廻り航路に従事することになった。このときから塩飽の廻船業は隆盛期を迎えることとなる。

塩飽の廻船業は元禄年間（1688～1704）を中心に、5代綱吉（在位1680～1709）、6代家宣（在位～1712）、7代家継（在位～1716）の将軍治世の時代を通して大いに栄えた。ちなみに正徳3年（1713）、塩飽七島では5石積み以上が472艘を数え、1,500石積みなどの大型船が112艘もあったと記されている。6代将軍徳川家宣、7代将軍徳川家継の代に活躍した新井白石も、諸国の廻船の中で「塩飽の船隻、特に完堅精好、他州に視るべきに非ず、その賀使郷民また淳朴（じゅんぼく）（純朴と同意）」と、「奥羽海運記」に記している。

瀬戸内海に面した香川県

塩飽七島の廻船業の中心地が牛島だった。延宝7年（1679）当時、牛島には52人の船持ちが住んでおり、合わせて48,750石の船を所有していたという。その中でも丸尾五左衛門は11,030石の船を持ち、塩飽一の船持ちだったとされる。

丸尾家の財力は他国にも知られていた。肥後藩主の細川家は、丸尾家から借金をしているが、細川家がこの借金を返済した様子はなく、いわゆる借りっぱなしだったみられ、返済を催促しなかった丸尾家は、肥後に対してずっと愛着を持っていたからと伝えられる。

享保元年（1716）、徳川吉宗が8代将軍に就任。塩飽廻船は引き続き城米御用船として幕府から直接雇われ隆盛を誇っていたが、享保5年（1720）になると幕府は城米をより安全にかつ安く運ぶため、その輸送方式をこれまでの直雇方式から廻船問屋請負方式へ変更し、江戸商人の筑前屋作右衛門に御城米船の差配を行わせた。いわゆる享保の改革の一環だったのであろうか。これにより塩飽の船持衆は、今までのように直接荷受けすることが出来なくなり、廻船問屋の雇船として安く下請けされるようになった。以降、塩飽の廻船数は急激に減少して行く。ちなみに、牛島には宝永（1704～1711）から享保7年（1722）にかけて45から49艘の廻船があったといわれているが、享保13年（1728）には23艘とそれまでのほぼ半数に減っている。

しかし、塩飽廻船が全くなくなったわけではなく、寛保年間（1741～44）頃からは米の輸送だけでなく、讃岐の特産品である塩、砂糖、酒、醤油、ムシロなどを積み込んで、港々に立ち寄って販売しながら東北や蝦夷地の北国へ行き、帰路は米を第一に干魚、昆布、鰊、織物などを積んで、大坂などで商売をしていたようだ。このように大坂と北国を日本海航路で往復した廻船を「北前船」といい、明治中頃まで塩飽を始め讃岐の各港でもみられた。北前船の寄港地だった日本海側の港町には、「塩飽屋」の屋号がある商家や、塩飽衆の墓が残された寺など塩飽衆の足跡をみることが出来る。

18世紀後半には、塩飽の廻船業は衰えて行き、17世紀後半から18世紀初めにみられたような隆盛を迎えることは2度となかった。幕府から直接御城米輸送を請け負っていた頃は、廻船業が塩飽の産業で、船乗りや造船、船の修理などで多くの人が生計を立てていたが、廻船が減少したこの頃には、それまでの船大工の技術を生かして家大工や宮大工へと転身し、瀬戸内海沿岸

香川県海運組合地区別事業者数と船腹量

令和2年10月1日現在　　全海運調べ

地　区	事業者数	隻数	重量トン m³PS
小豆島	22	36	40,624
坂出市	12	18	15,765
高松市	9	11	6,309
観音寺市	7	9	28,832
丸亀市	4	20	24,320
三豊市	2	2	990
東かがわ市	1	1	1,600
他地区	3	3	2,585
合　計	60	100	121,025

を中心に他国へ出稼ぎに行き、塩飽大工と呼ばれるようになった。そのため島の中は、老人や子供ばかりになっていたといわれている。牛島の長徳院極楽寺には、明和２年（1765）に塩飽の年寄から江戸勘定奉行へ差し出された「塩飽島諸事覚」が残っているが、その中には「島内で暮らしを立てるのは難しく、男子は12～13歳になると他国へ出て水夫になり、あるいは多くの者は大工職として近国に出稼ぎに出た」と記されていると伝えられている。

阪神経済圏に至近の好立地条件

【船どころの特色】

香川県の県都・高松市には中央官庁の出先のほとんどが置かれており、四国運輸局もある。高松市の令和２年(2020)10月１日現在の人口は約42万6,118人で、松山市の50万7,085人（令和２年12月31日現在）に及ばないが、かつては四国第一の都市だった。

香川県は古くから製塩、石材、醤油、肥料などを産出し高松、丸亀、小豆島などから主に阪神方面へ出荷していた。県下の主な船どころとしては小豆島（小豆郡）、高松市周辺、坂出市、観音寺市などがあるが、ほとんど県内の産物輸送に従事していたため、鋼船化が本格化したのは昭和40年（1965）以降で、少数の先進派はいるが、いまでも小型船が中心である。香川県は、徳島と並んで阪神経済圏へ近く、立地条件に恵まれているので、結びつきが強い。香川県海運組合の所属内航海運事業者と船腹量をみると、前頁のように小豆島が全体の３分の１を占めて圧倒的に多く、これに坂出市、高松市が続く。

船どころ別に特色をみると、最も事業者数の多い小豆島地区は大阪城築城のときに、石材を出荷したことで知られる古くからの砕石の出荷地。いまでも石材運搬船が活躍しており東京湾内、関西新空港の埋立工事で活発に動いた。また、小豆島にはマル金醤油（盛田）の工場があり、神戸～小豆島に専用船が２隻就航している他、胡麻油工場向けの小型船も就航している。県中央地区はかつて海砂利の採取地で、砂利船の船どころでもあったが、香川県では、平成１７年４月から海砂利採取は全面禁止となり、
砂利採取運搬船は激減した。県西部地区には東予工業地帯の丸住製紙、大王製紙で栄える川之江、三島があり199総㌧型船が多い。高松地区では東京製鐵が平成24年３月に高松工場を操業停止して跡地に高松鉄鋼センターを開設、四国内の屑鉄の集積場として活用しており、四国内のくず鉄が集積されており、その搬出に199総㌧、499総㌧型船が使われている。坂出・丸亀地区には四国化成があり、特殊タンク船が数隻、ここを拠点にしている。

県内組織一本化で事業活発

【組合概要】

かつて香川県には、15地区組合を結成する香川内航海運組合連合会（県連）と香川県内航海運組合（県組合）の２つの海運組合があった。

香川県下の海運組合のルーツは、さらに機帆船時代に遡ると、昭和33年（1958）の小型船海運組合法施行当時には地域別、オペレータ別に18の地区海運組合が存在していた。それらを県連が束ねる体制が昭和39年（1964）の内航２法施行後も継承された。県連は昭和42年(1967)８月、内航海運組合法に基づく組合として設立された香川県機帆船海運組合連合会（8組合で構成）、香川地区機帆船組合連合会（8組合で構成）、香川県小型船鋼船海運組合（鋼船30隻で貸渡業者が結成）の３連合会を統合して改めて組織化されたものだった。方の県組合は昭和38年（1963）２月、３連合会組織に参加しなかった事業者によって結成された組合だった。

戦時中の統制下には、香川県下の内航海運業者が香川県機帆船統制㈱に一本化されたこともあり、戦後も各地区ごとにそれぞれ機帆船組合を設立されものの、一時これらが連合会にまとめられた時期もあった。

昭和48年（1973）に運輸省（現国土交通省）の構造改善指針を契機として、組合再編成論議が全海運内部で活発になると、香川県下でも小型鋼船船主主体の香川県内航海運組合（県内航）が県連から離脱して全海連に直接加盟する動きをみせた。

全海運の各地でも様々な動きをみせたが、香川県下では紆余曲折を経て活性化のためには地区組合では組織が小さく、組合活動に実効性を欠くとされ、業界の繁栄と向上を目指すため、県下内航海運事業者を一丸とする必要であるとの結論に達した。これには四国海運局（現四国運輸局）からも、運輸省の推進する内航海運業界の構造改善、組合組織の合理化、事業活動の適正化等の方針から組合統合が望ましいとされた。香川県下ではその趣旨に沿って、県下一本化の組合に統合するための「一本化推進委員会」が設けられ、1年間にわたって様々な論議が繰り広げられた。その結果、昭和55年（1980）5月に県連を解散。同年（1980）8月、香川県海運組合が新たに設立され、統合が完了した。県下業者の大同団結の趣旨に沿って香川県海運組合に一本化されたのは画期的なことで、その意義は大きかった。

さらに香川県海運組合は、県下全域を区域としているが、この実効を上げるためには基盤づくりが大切だとされた。そのため、従来の地区組合を3年間の過渡的措置として、一時的に香川県海運組合傘下の14支部とし、改めて昭和58年（1983）4月に14支部を解体し、名実共に県下統一を果たしたのだった。

以降の新体制では、理事会のもとに総務委員会、航行安全対策委員会、船主部会、輸送部会、砂利船部会を設置し、それぞれの分野で活発に運営している。このうち航行安全対策委員会は、文字通り組合員所属船の安全対策を推進するもので、海上保安部の協力を得て漁業免許事案、漁礁設置個所や海難事例の説明などを中心に検討・協議している。3部会は全海運組織に対応して設けているもので、中央での出来事に対応した方針の検討と周知が主体。この他、組合活性化事業として毎年11～12月に西讃地区（観音寺市・三豊市）、東讃・中讃地区（東かがわ市・高松市・直島町・坂出市・丸亀市）、小豆島地区（小豆郡土庄町・小豆島町）の3地区ごとに組合員地区別懇談会を開き、組合活動状況の説明や法令等の周知を図っており、この地区懇談会に併せて航行安全・海難防止講習会、安全衛講習会を開催している

また、船員雇用対策として毎年8月に、国立波方海上技術短期大学校を始め香川県立多度津水産高校の就職指導教諭と総務委員会のメンバーが就職懇談会を開催。これを通じて新卒者に限らず両校ＯＢのＵターン組を地元で採用したり、県下高校生に波方海員学校を紹介したりしている。香川県海運組合では昭和58年（1983）から月1～2回、事務局が機関誌「海運ニュース」を発行し、全海運や総連合会の活動状況を解説するとともに、関係機関からの法令・情報等の周知を図っている。

さらに香川県海運組合では、組合員の意志疎通を図るため、組合員地区別懇談会を組合員の集合しやすい日曜日に正副理事長が訪問して開催し、日頃吸収しにくい末端組合員の意見にも耳を傾けている。

事務局はJR高松駅南西の高松市錦町1-21-3の開拓ビル4階で、ワンフロアを四海連と仕切って使用。事務局員は谷良夫事務局長と大山幸奈さんの2名。

谷さんは四国海運局出身。毎月『香川海運ニュース』を発行し、総連合会や全海運の活動状況、関係機関からの法令・情報等の周知、組合員への業界事情と組合活動の適格な報告を欠かさない。また、新規学卒者就職指導要請活動、雇用船員の育成と定着策、航行安全、海難防止講習会、安全・衛生講習会等の開催を手掛けている。

【海にまつわる神社】

海の守護神「こんぴらさん」

高松築港駅から琴平電鉄に揺られること1時間、琴平駅を降りれば、讃岐の「こんぴらさん」の愛称で庶民の信仰を集める金刀比羅宮の門前町。金刀比羅宮は日本を代表する海上安全の守護神で、毎年「海の日」前後に海運業界がこぞって参拝することでも知られている。

金刀比羅宮は真言宗象頭山松尾寺の堂宇のひとつで、神仏習合の金毘羅大権現を祀り、その別当として寺中の金光院が奉斎して来た。だが、金毘羅大権現が隆盛し、本堂本尊十一面観音を凌駕したことから、後発の寺中であった金光院が全山を支配することとなった経緯がある。明治初年の神仏分離、廃仏毀釈により、金毘羅権現の奉斎は廃止し、大物主神と崇徳天皇を主祭神とする神社となった。「古事記」によれば、大物主神は神武天皇の岳父、第2代綏靖天皇の外祖父にあたる。三嶋湟咋の娘で美しい玉櫛媛を気に入った大物主神は、赤い丹塗り矢に姿を変え、玉櫛媛が用を足しに来る頃を見計らって川の上流から流れて行き、彼女の下を流れて行くときに陰所を突くと、彼女は驚き走り回った。大物主神はすぐにその矢を自分の部屋の床に置くと麗しい男の姿に戻った。こうして2人は結ばれて、生まれた子の比売多多良伊須気余理比売が神武天皇の后となったとされる。大物主命は、出雲大社のご祭神としても知られる大国主命の和魂で、国を平和に収める役割を持つ。大物主神が大国主命と出会う際に「海から現れた」といわれており、金刀比羅宮は古くから海の神様、航海の神様として知られている。和魂とは神が持つ穏やかな和魂と勇猛な荒魂の対の魂で、大物主神は和魂というわけだ。境内の絵馬殿には航海の安全を祈願した多くの絵馬が並んでいる。崇徳天皇は平安時代末期の天皇で、長寛元年（1163）に参籠した記録が残っており、亡き後も四国守護の細川頼之が崇徳天皇の菩提をここで弔ったことから主祭神となったようだ。

金毘羅宮本宮（左）と海上安全の御守護札

参宮は、象頭山の中腹にある本宮まで785段、山頂近くの奥社まで1,368段もの石段を上る苦しい道程であるにもかかわらず、年中参拝客が絶えない。

【参考文献】瀬戸内・海の路ネットワーク推進協議会「瀬戸内海の歴史」、学習院桜友会「香川県の歴史」、香川県図書館「讃岐の歴史」、香川県の歴史散歩編集委員会「香川県の歴史散歩」（山河出版会刊）

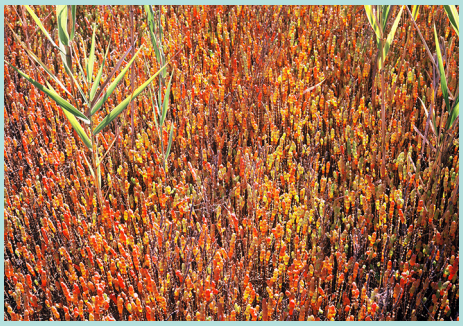
【取材こぼれ話】

北前船とアッケシ草

塩田にみられたアッケシ草は北前船によって、北海道から瀬戸内海に運ばれたといわれて来たが、近年これが覆されている。瀬戸内海の海運発祥について調べているうちにみつけた話である。

アッケシ草はアカザ科で塩分を好み、秋に赤く色づく塩生植物で、海に接する陸地や内陸の塩湿地に生育する。葉のない1年草で高さ10～30cmほど、茎は丸く肉厚で10月中旬頃に深紅に紅葉する。

日本では北海道と瀬戸内海沿岸に自生する植物で、これまでの通説では、北海道から瀬戸内に北前船で運ばれたとされて来た。北前船は瀬戸内から塩などを北海道に運んだ帰り荷に、船を安定させるため北海道の砂を積んでいた。この砂の中にアッケシ草の種子が入って北前船で運ばれ、瀬戸内の塩田で繁殖したといわれて来たのだった。



群生するアッケシ草（写真提供:photolibrary）

ところが、これがDNA鑑定の結果、間違っているという。四国新聞（平成19年11月）、山陽新聞（平成21年6月）の記事から引用すると、「大学教授がDNA解析をした結果、北海道のものとは一致しなかった」としている。

山陽新聞では「岡山理科大学の星野卓二教授が平成20年（2008）、東京大学の池田博准教授と韓国に行き3カ所で個体を持ち帰り、瀬戸内ものの DNA を解析して比べたところ、100％一致した」とし、また、「北海道と韓国のものは逆に一致なかった」という。瀬戸内海のアツケシ草のルーツは、北海道より韓国の可能性が強くなっている。

いずれにしても、科学の発達は新しい可能性を生み出すと共に、瀬戸内海と朝鮮半島の交易が盛んだったことを改めて知ることになった。このアッケシ草は、坂出の塩田にも多く自生していたが、昭和46年（1971）、法律によって全国一斉に塩田がなくなり、今やほとんどみられなくなった。（米山）